

知識調整メカニズムとしての役割：役割理論の課題 と構図を求めて

三隅，一人
九州大学比較社会文化研究院日本社会文化専攻・地域構造講座

<https://doi.org/10.15017/8667>

出版情報：比較社会文化. 11, pp.61-70, 2005-02-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

知識調整メカニズムとしての役割 —役割理論の課題と構図を求めて—

Role as a Knowledge Adjustment Process

三 隅 一 人

Kazuto Misumi

(日本社会文化専攻・地域構造講座)

キーワード：役割理論，役割知識，マイクロ・マクロ・リンク，行為-意味リンク

1. 役割概念，再訪

人はある社会的地位に身をおくことで、さまざまな期待にさらされる。結婚して夫や妻の地位に身をおくと、働いて家計を支えたり、パートナーを精神的にサポートしたりといったさまざまな態度や行動が期待される。さらに子どもができて父親や母親の地位を得ると、子どもの養育に関する各種の期待が加わる。そうした他者からの期待および自己自身に内面化された期待が、(ときとして葛藤や反発を引き起こしながら)人びとの行動に一定のパターンを与える側面を、社会学は「社会的役割」(以下では単に「役割」という)として概念化してきた。役割には多くの関連概念があり、さまざまな文脈で使用されているが、ここで重要なのは次の2つの大枠的な文脈であろう。¹⁾

一般にある社会や集団において、特定の地位にどのような役割が付着するかについての知識が人びとのあいだでばらばらだ、ということはあまりない(これを「役割知識の共有性」とよんでおこう)。役割知識の共有性が保たれるのは、しつけ、教育、模倣といったさまざまな契機を通して、既存の役割知識が伝達されたり、伝播したりするからである。こうした契機が社会や集団のなかで広く、繰り返し経験されることによって、共有性の高い役割知識が人びとの内面にとりこまれる。その一方で、役割から逸脱する行動に対して社会的サンクションを与え、役割知識の共有性を保持するような、社会統制のしくみも発達する。たとえば、子どもの面倒をみずに大けがをさせた母親には、身内や近所から叱責が浴びせられるだろうし、場合によっては法的な制裁が加えられるだろう。これは当人の矯正ということだけでなく、「見せしめ」効果によって他の母親たちの逸脱を抑止することにもなる。こうした側面のゆえに役割概念

は、個人の同調を引きだしながら社会秩序を維持するための媒介装置として注目されてきた。役割の「規範論」といえる文脈である。

一方、内面化と社会統制によって人びとのあいだに役割知識の共有性が保持されることは、たとえあるにしても部分的であって、むしろ役割は動態的な相互行為プロセスにおいて準拠的な機能を果たすだけだ、という見方もある。かりに役割知識の共有性が高度に保たれていても、それを各個人がどのように解釈するか、あるいはそれにどの程度コミットするかに関しては、一定の自由度がある。たとえば、母親に関して共有された役割知識の範囲内で、その内容をより重要な要素とそうでないものに区分けするようなことはあるし、通常そうしたレベルの多様性にまで社会統制は及ばない。共有された役割知識から距離をおきながら、そこで期待されている役割を適当に演じ、同調を装うこともできる。このように考えると、役割を通して確認される社会秩序はせいぜいその場限りの局所的で一時的なものではない。こうして多様な主観的解釈性を前提にして役割制度化のあやうさに着目するとき、そこに役割のもう一つの顔、すなわち役割の「解釈論」といえる文脈がある。

規範論と解釈論の主な対立点は役割概念そのものよりも、役割をどういう文脈に位置づけるかという文脈の違いにある。一言でいえば、それは役割を社会の側からみるか、それとも個人の側からみるかという文脈の違いである。異なる文脈から同じ現象の違った側面が見えてくることは当然あることだが、だからといって役割理論がそのどちらかに二者択一的に依拠する必要はない。社会学は、個人と社会との関係をいかに整合的に説明するか(マイクロ・マクロ・リンク)を主要課題としてきた。役割という現象にはその課題が濃縮的に投影されている。それを、マイクロ/マクロ

で文脈的に引き裂くのでは、せっかく役割概念に準備された晴れ舞台が色あせてしまう。

とはいえこの課題は難題である。それは、マイクロ・マクロ・リンクという理論的課題に、もうひとつの難題が織り込まれているからだ。先ほど述べた文脈の違いは、単純化をおそれずにいえば、秩序均衡の社会システム論に引き寄せるか、それとも人間解放の社会理論に引き寄せるか、そうした理論的思潮の違いとしてみる事ができる。役割をどちらの思潮文脈におくかによって、そこに描き出される人間像が異なる。前者を突き詰めれば、役割という枠にはめられる没主体的な人間像が描き出され、後者を突き詰めれば、不断にその枠を再構築する主体的な人間像が描き出される。ふたたび単純化をおそれずにそこでの対立点をいえば、システム挙動の客観的把握に重点をおいた行為論と、日常世界の解釈的把握に重点をおいた意味論の相克である。

一般的には行為⇔マクロ、意味⇔マイクロという対応関係の必然性はないけれども、実際の議論のスタンスとしてはそうした対応関係が形づくられてきた。かくして役割概念は、マイクロ・マクロ・リンクと行為-意味リンクという社会学における2つの主要課題を背負う。我々は、こうして2つの課題が分断的に重なり合う状況を規範論/解釈論として特徴づけようとしているのである。逆にいえば、役割が解ければ社会は解ける。しかし現実的には、むしろ永遠の難題を二重に抱え込んできたというべきである。²⁾

我々は、この二重の課題と向き合いつつ、役割概念を従来の文脈的な相克から相対化したいと考えている。一言でいえば、それが位置づけられる文脈に従属しない、役割に固有な役割理論の定立である。そのために、役割概念が背負ってきた文脈的負荷をできるだけ取り払ったときに、そこにみえてくる役割固有の理論的課題とその構図を吟味したい。より端的に言えば、役割現象に固有のメカニズムを絞り込んだときに、そこに何が残るか。その可能性を<知識調整のメカニズム>という側面に求めながら吟味する。これが本稿の課題である。³⁾

2. 規範論のメルクマール：相互行為の安定性と制度化

役割をめぐる相互行為の状況依存的な不安定さについては、規範論と解釈論で接近する論点が少なくない。ただし、規範論ではそれがゆえに、その安定化を確保するための社会的装置がメルクマールになる。ここで問われるのは、そうした社会的装置と役割概念との関係である。相互行為のダイナミクスと均衡というマイクロ・マクロ・リンク課題から考えると、その課題を背負う役割概念は、まさにそうした社会的装置のメカニズムを述べるものであることが期待

される。けれども、話はそう単純ではない。まずはその点を、規範論の代表的論客といえる T. Parsons を中心に考察する。Parsons の議論は時期を追って微妙に変化しているが、ここでは、役割概念に関して詳細な議論を展開している Parsons and Shils (1951) をひとまずの出発点にする。

Parsons は、相互行為における二重の依存性 double contingency を志向の問題としてとらえ、期待の相補性 complementarity of expectations という概念装置によってマイクロ・レベル相互行為の仕組みをとらえようとした。期待の相補性とは「(自我と他者の)それぞれの行為が、相手方のいざ期待に対して志向している」ことを指すが、これは互いの期待が同一であることではなく、相補性の水準は期待に対する同調性の範囲の問題とされる (Parsons and Shils 1951: 訳24-25)。すなわち、相互行為の安定性は本来的に可変的であり、それは他者の期待への志向の相補性によって条件付けられる。役割概念も、役割期待 role-expectations をその基本的要素とするので、この議論の延長線上に据えられる。役割期待は、組織化され、安定化した自我と他者との相互行為のなかで形成される、相手方の行為と態度に関する相互的な期待 (Parsons and Shils 1951: 訳31)である。この定義からすれば、それはある一定水準以上の相補性が成立しているときの期待に、特別な名前を与えただけのものである。だとすれば役割は、期待の相補性が含意する相互行為の不安定さを何ほどか持ち込んでい

る。役割概念はこうした不安定さを抱えつつそれでも一定水準に安定した相互行為を保持する、そのメカニズムを述べるべきであろう。そこに関わる主要概念はサンクションである。サンクションとは「自我の行為を条件にした、他者の自我に対する反作用」(Parsons and Shils 1951: 訳24)であり、相互行為そのものの性質として備わった行為の統制装置である。他者の肯定的な反作用は、自我にとって要求充足的な意味をもつことで当該行為の動機づけを強化し、他者の否定的な反作用は、逆に要求阻害的な意味をもつことで行為修正を促す。相互行為における二重の依存性は、こうしたサンクションに対する相互的な予期を含意している。

しかしながら、相互行為の安定に関わる役割メカニズムをサンクションのみに求めるのは、いくつかの点で問題がある。このことを、初期 Parsons の主意主義的行為論に立ち戻りながら考察したい。Parsons (1937) は単位行為を行為者、目的、状況の3要素で考え、実証主義(とりわけ功利主義)行為論が抱える目的のランダム性の問題を克服するために、目的選択を水路づける価値関係性を考慮する必要があること、そしてそのためにウェーバーの理解社会学的な理念主義を導入する必要があることを唱え、そのスタン

スを主意主義と称したのだった。期待の相補性は、価値関係性と目的の調整がある程度うまくなされている状態を指している。ここにおいて役割概念は、目的と手段の調整過程よりは、価値関係性と目的の調整過程にその居場所を明示的に得る。これまで役割概念を相互行為の安定性と関係づけてみてきたけれども、それはこうした全体社会レベルの意味調整と重ね合わせて考える必要がある。

この確認から、サンクションに関して次の2つの問題を指摘できる。第一に、役割理論の第一義的な射程を価値関係性と目的との調整過程に求めるとき、サンクションは要求の充足/阻害という目的-手段の問題系にバイアスがあるため、やや理論的整合性が悪い。これは「要求」を広く捉えれば済むことかもしれないが、第二の問題がある。サンクションは個別的な相互行為における統制装置である以上、それが社会全体として目的のランダム性を減じる方向に働く保障はないのである。むしろ目的のランダム性に応じて、統制の方向もランダム性を帯びると考えざるを得ないだろう。

Parsons において、目的のランダム性を減じる仕組みは主意主義的行為論の外側に、そしてまた役割概念そのものとは別の社会的メカニズムに、求められているようにみえる。役割の制度化、がそれである。評価の型であるところの役割は、特定の相互行為における期待が一般化され、人びとの共有する価値の型と統合されるその程度に応じて、制度化される (Parsons and Shils 1951: 訳31,300-301)。この言い方からわかるように役割の制度化は、任意の社会構成員の間で一定水準の期待の相補性を準備的に保障する、全体社会レベルの仕組みを述べている。けれども役割は制度化されるものであって、制度化の仕組みが役割であるわけではない。その実質的な中身は、社会化と社会統制という、役割概念そのものとは分離可能な(役割に特有とはいえない)別の一般的な社会的メカニズムなのである。

主意主義的行為論は目的-手段の問題系と価値-目的の問題系との行為-意味リンクを、ミクロ・マクロ・リンクと交差させて解こうとした、意欲的な試みである。しかしながら、少なくとも後の Parsons の社会システム論における比重は、制度化を通して一定の価値関係性のもとに目的が整序され、期待の相補性が確保される(社会システムの機能要件に必要な役割遂行が確保される)側面におかれた。[価値→目的⇔手段]というマクロ→ミクロ的な行為-意味リンクの側面である。一方では、価値関係性のあり方を把握するためのパターン変数が導入され、その図式展開の中に[価値←目的⇔手段]というミクロ→マクロ的な行為-意味リンクの理論的課題は封殺されてしまった。⁴⁾

もっとも、制度化に比重をおいた役割概念化は、相互行為システムの客観的分析という点で一定のメリットを有す

る。だからこそ Dahrendorf (1959) は、行為期待としての役割概念を個人と社会を媒介するキー概念として位置づけ、社会学の主題を行為期待としての役割の構造を発見することに求めた。しかし同時に彼は、行為期待に呪縛され疎外される「ホモ・ソシオロジクス」と、役割からまったく自由な「全体的人間」を対置させながら、役割概念が社会学理論に持ち込むパラドックスを警告する。個人の本源的な人間としての自由は、役割 (=「社会という腹立たしい事実」)からの離脱によってしか確保できないが、その一方で、個人はホモ・ソシオロジクス(役割演技者)と化して初めて社会学の分析対象となる。かくして社会学は、本源的な人間解放の契機を自らの理論枠から締め出すことになる、というのである。

こうしてホモ・ソシオロジクスに収斂する役割概念化の問題は Tenburuck (1961) によって「役割概念の物象化」と称され、その理論的な位置づけ方や回避の現実的契機をめぐり、マルクス主義的現象学を中心に多くの論議を呼び起こした (Berger and Pullberg 1965; Berger and Luckmann 1966; 栗岡 1980; 廣松 1986-1988)⁵⁾。物象化はアナロジーである(もとより役割に固有の性質ではない)以上、制度化と同様にここでこれらに深く立ち入ることはしないけれども、価値関係性と目的の調整という主意主義の主題との関連で留意しておきたい論点がある。ひとつは、Berger らが提示したように、象徴世界の力動の中に役割概念を位置づける可能性である⁶⁾。これについては役割知識の視点として後に再考する。今ひとつは、田中 (1984) が物象化を Mead 意味論に慎重に対応づけながら吟味した理論命題である。曰く、「秩序は、自己-他者間の役割の布置関係がアンバランスなままでも可能なはずである」。田中の立論に依拠するかどうかは別として、この命題は役割理論が解くべき中心的課題の一つを的確に述べている。

こうしたホモ・ソシオロジクスをめぐる批判的議論に留意しつつも、当面我々としては、主意主義的行為論の当初の企図にそって、役割理論の第一義的な射程を価値関係性と目的との調整過程に求めたい。そして、価値⇔目的の両方向のリンクが交差するところに、制度化の文脈から独立して存立する役割固有の理論的課題を探りたい。それは、与件とされる制度化の水準に応じて相互行為の安定性が決まるという立論に取り込まれることなく、なおかつ相互行為の安定に関わるメカニズムの問題である。そのメカニズムを明示化できれば、どういう条件が満たされるときに役割は自ら制度化を促進するのか(あるいはそれと対抗的な変化を促進するのか)、といった課題を指定することができる。また、田中が提起した理論命題に対して、より実証的な解答を与える可能性もみえてくるだろう。その糸口を求めて、次節では解釈論を吟味する。

3. 解釈論のメルクマール：役割取得と主体性

規範論とは逆に、解釈論は、マイクロ→マクロ的な行為-意味リンクにウェイトをおいた立論をとる。先の物象化の議論とも関連するが、そこでのメルクマールを一言でいえば、役割概念における主体性の確保といえるだろう。それは突き詰めれば、他者性ないし社会性の根源的な発現過程に関する現象学的考察にまで及ぶけれども、ここではひとまずの焦点を役割の解釈過程に絞り、そこに知識調整メカニズムとしての役割概念を考えるための糸口を探りたい。具体的には、シンボリック相互作用論の立場から役割概念を展開した解釈論の代表的論客、R.H. Turner を中心にみる。⁷⁾

Turner の基本的な視点は、役割行動を、個人の社会的環境に対する絶え間ない解釈と適応としてみる点にある。役割は、それが方向づけられる他の関連する諸役割との関係において、存在する。相互行為は、一方がもっている他方の役割に関する観念の相互チェックを行うような、常に「試験的な」過程なのである (Turner 1962: 23)。

この視点からみると、同調、期待、承認をキーワードとする規範論的な役割モデルはややきつすぎる。規範論において、エゴは役割取得 role-taking によって他者の役割(とくにエゴの役割に関する他者の期待)を取得し、他者の期待に同調できるようになる。そして、役割取得と役割遂行が同調を確保できるようにきちんとなされたことを確認できれば、承認が成立する。裏返せば、同調の欠如は役割取得の失敗に起因する。けれども、役割取得は、実は不完全であることを常とするのであり、それはエゴの中に他者からの反応の緩やかな限定された範囲を準備するにすぎない。その意味で「期待」よりは「構え」state of preparedness なのである (Turner 1962: 32-33)。こうして Turner は同調をあくまで一時的調整 working adjustment と捉え、役割取得から役割形成 role-making への概念転換によって、主体性の理論的契機をそこに明示化しようとした。

Turner の議論は、知識調整メカニズムとしての役割という観点からいくつかの重要な示唆を与える。第一に、Parsons のいう相互行為における二重の依存性を、役割の同定をめぐる二重の確認 validation という形で、役割概念にひきつけて具体化している点である。二重の確認とは、自分自身の役割遂行にとって必要な範囲内に、関連する他者の当該行動に関する期待が収まっているかという内的確認と、その妥当性や正当性に疑問をもっているかもしれない他者によって、当該行動がある役割を構成すると判断されるかという外的確認である。こうした確認作業を通して、役割とその内容の同定は継続的な修正のもとにおかれる。

第二に、そうした確認の準拠フレームワークとして、基本的には役割を主観的な解釈のもとに位置づけている点で

ある。「行動が理解可能だといわれるのは、一連の行為を、その行為者が彼の行動を水路づけるいくつかの役割を思い抱いていることを示すものとして、解釈できる場合である」

(Turner 1962: 24)。このように上記の確認作業は、役割の想起とそれへの準拠を意味するが、それは個人の解釈過程を経た行動のパターン化と役割へのマッピングとして、まさしくフレームワーク程度の厳密さしかもたない。したがって確認の基準は自他で多少とも食い違い、それがゆえに役割は常に妥協の産物 compromises なのである。

ただし、そのような相互行為秩序の暫定的性質を前提にして、それがどのようにして制度化の局面に展開するのかという点については、Turner にも納得的な答えは準備されていない。Turner は、役割取得が一定範囲に行動をパターン化し、役割との間に一定範囲のマッピングを促すような、一貫性の規範 norm of consistency を発達させやすいことを認める。役割の同定が固定化に向かうかどうかは、この一貫性の規範の確立度に依存するというのである。我々は前節で、制度化に踏み込む前の Parsons が、相互行為の安定性を、他者の期待への志向の相補性に条件付けられる可変的なものとして捉えていることをみた。一貫性の規範に関する Turner の立論形式は、そのトートロジーに止まっている。

この最後の点は、解釈論的な役割論が何らかの形で共通して抱えるマイクロ・マクロ・リンクの難点であるだけに、Turner 評価をめぐる大きな論点となった。ただし我々にとって、主体性の制度化の隙間からの解放、といった主体性そのものの議論文脈には関心が無い。これは社会のあるべき姿の理念的な提示を企図する社会理論の課題として重要かもしれないが、我々が企図する役割理論にとって重要なことはむしろ、こうした議論文脈を相対化し、現にある主体性のあり方を柔軟に分析できることである。このような趣旨からここで注目したいのは、Berger and Luckmann (1966) や Schutz (1970) をベースにして小林 (1983) や深澤 (1990, 1994) によって展開された役割知識の議論である。

小林のいう役割知識は「社会的期待に基づく社会的行為についての類型的知識」であり、社会構造内に埋め込まれた貯蔵状態としての「役割知識のストックは、フロー状態にある役割知識、すなわち社会的期待のメッセージの解読のための枠組となり、同時に諸個人や組織、集団内での制御装置となっている」(小林 1983: 48)⁸⁾。さらに、役割知識のストックが相手の反応を予期するための解釈コードとして作用する解釈過程と、期待の受け手の側でコード・スイッチングされて調整に付される制御過程とを考慮し、役割プロセスの内部メカニズムに踏み込んだ考察を行っている⁹⁾。一方、深澤は、役割間の結合の仕方に応じて一定の

階層的構造をもつような役割知識を想定しつつ、むしろ遂行が先行して事後的に役割が認知されるようなより構築主義的スタンスをとっている¹⁰⁾。けれどもやや粗くいえば、深澤が役割知識の基本性質とする logic-in-use と reconstructed logic の二側面は（深澤 1994：59）、小林のフローとストックに対応づけられるであろう。

これらの役割知識論は、知識の習得と活用という視点から制度化の論点を捉えなおした議論として興味深い。我々は Turner の議論から、役割の同定をめぐる確認のための主観的フレームワークという、知識調整メカニズムとしての役割概念の糸口を得た。そこに役割知識の視点を組み込めば次のようにいえるだろう。主観的フレームワークの参照先として、一定の客観性をもった役割知識を指定できる。その客観性は相互行為の現場で不断に確認されるものであるが、だからといってその客観性が簡単に壊れるわけではない。相互行為において葛藤のないし対立的な状況が生じて、所与の役割知識のもとでその場のコミュニケーションを可能にする解釈コードは多様にあり得るからである。しかしながら、そうした解釈コードの不具合が頻繁に生じるような事態に陥れば、役割知識が修正・改編される可能性は十分に開かれている。

こうして、制度化の文脈を完全に切り離すことはできないが、ある程度それを相対化したところに、そしてまた、サンクションの発動をとまなう行為の地平とは異なる認識の地平に、役割知識の習得と活用をめぐる確認・調整過程という役割固有の社会的メカニズムの可能性がみえてくる。次節ではこうした理論化の足場を、規範論と解釈論の統合を企図するいくつかの媒介的議論によって補強することを試みる。

4. 媒介的議論による補強

基本的には規範論的スタンスに立ちつつ、解釈論が示唆するような現実的な相互行為のダイナミクスに迫ろうとする、いくつかの媒介的議論がある。これらには役割固有の現象をターゲットにした議論が多く、理論的視点とともに役割理論の射程の確認という趣旨でも目配りしておかなければならない。

第一に、役割セットと役割葛藤を軸としながら、役割が抱えもつ構造的緊張を指摘した一連の実証的・理論的研究がある。Parsons が社会システム論を世に問うた時期に前後して、役割葛藤に関する多くの実証研究が表れ、ホモ・ソシオロジクスの世界の非現実性を指摘した（Stouffer 1949；Stouffer and Toby 1951；Getzels and Guba 1954；Gross et al. 1958）¹¹⁾。とりわけ Gross らは、督学官への詳細かつ体系的なインタビュー調査を行い、行為者に

高度に一致した役割期待が向けられる状況（役割コンセンサス role consensus の理論的仮定）に疑問を提示しながら、役割葛藤状況が一般的に存在することを示した。ここでいう役割葛藤は、当事者個人が両立不能な複数の期待に直面したと認識し、そのために内的葛藤を経験する状況である。それが異なる役割間で生じることは容易に予想されるが、Gross らは、役割コンセンサスの水準如何ではそれが単一の役割についても生じることを示したのである。

一方、Merton (1957：訳 IX 章) は役割セット role set の概念を打ちだして、社会構造が本来的に抱えもつ構造的緊張を捉えるための理論的視座を整えた。個人がさまざまな地位を占めることから引き受ける複数の役割 multiple roles とは異なり、役割セットは、個人がある一つの地位を占めることで引き受ける役割関係の総体を指す。例えば学生の地位に就いた個人は、教師、事務員、上級生、同級生などと関係づけられる一連の役割を引き受けることになる。それがゆえにしばしば相矛盾する役割期待にさらされ、役割葛藤に陥る。役割セットは地位体系に対応する構造的性質であり、それが生み出す力動は制度化の程度に条件付けられない。しかもその力動は、社会システムが機能的要件を満たすために必要な役割遂行を脅かす。かくして社会は常にその内部に構造変動の契機を抱えもつ。Merton and Barber (1963) は、そのように役割の社会的規定の中に潜在的に矛盾する諸規範が仕込まれている側面を、社会学的アンビバレンスと称し、それを助長する構造的仕組みの分析を社会構造研究の主題に据えた。

さて、我々は前節までの考察を経て、制度化と主体的関わりの媒介的位置にあって、役割遂行と主観的フレームワークを手がかりに役割知識（相互行為状況の意味づけ）を確認し合うような社会的プロセスに、役割理論の焦点を求めたのだった。役割葛藤の議論は、この理論枠組みにいくつかの具体的展開の方向性を示してくれる¹²⁾。Gross らの研究は、役割知識における役割定義の非一意性と役割確認プロセスとの相互規定関係の問題として、そしてまた、主観的フレームワークの多様性と役割確認プロセスとの相互規定関係の問題として、役割理論の課題を具体化する。これらは基本的には役割知識⇔フレームワークの側面における課題である。それに対して役割セットは、主観的フレームワークをどのように定式化するかという問題に、より直接的に関わる。少し詳しく述べよう。

Merton は、役割セットの中でどの役割関係が突出するか（遂行の優先順位の上にくるか）という問題を、権力関係に言及しながら議論した。この議論は、当事者が役割セットの状況から想起する複合的フレームワークをどのように調整するかという問題として、そのまま我々の理論枠組みに接合する。ただし解釈過程を取り入れた我々の枠組みは、

古典的な役割葛藤モデルが想定した状況、すなわち個人が相矛盾する期待に対して択一的な役割遂行を迫られる状況に止まる必要はない。解釈過程を媒介として考えれば、役割葛藤の現実的状况に応じて関連する期待の妥協が可能な場合もある (Gerhardt 1973)。例えば、複数の期待に妥協的に、しかし同時に応えようとする遂行の仕方である。これは、個人内部のフレームワーク調整よりも、相互行為において相手のフレームワークを操作するような戦略的相互行為 (Goffman 1961) を含めた、相互主観的なフレームワーク調整の問題になる。

以上のように、役割コンセンサスと役割セットが提起する課題は、前者が知識-認知側面、後者が認知-行動側面とやや位相を異にしており、この両側面の関係づけという大きな理論的課題もみえてくる。けれどもその課題への取り組みを急ぐよりは、まずは基礎固めである。そこで、ここでは役割葛藤の論点を我々の理論枠組みに収めることができたことの確認にとどめ、残りの紙面を、主観的フレームワークの構成に関してより具体的な概念図式を探るための考察に割きたいと思う。そのために今一度、ホモ・ソシオロジクスをめぐる議論に立ち戻る。

ホモ・ソシオロジクスが非現実的な前提のもとでしか考え得ないことは、物象化に関連づけた議論でも指摘されてきたが、役割論の内部にとどまりつつ分析的にそれを論じ、規範論と解釈論を統合する概念図式を形づくってきた一連の研究がある。Habermas (1973) によれば、ホモ・ソシオロジクスは行為の可能的自由の3つの次元において、極端な限界事例を与件的に仮定している。(1)統合の定理 (期待の相補性)、(2)同一性の定理 (役割定義と役割解釈の一致)、(3)同調の定理 (行動面への規範的内容の現実化) という3つの仮定である (野村 1982: 240-245も参照)。同様に Levinson (1959) は、役割要求 role demand (従来の役割期待)、役割観念 role conception (自己の志向性ないし観念)、役割遂行 role performance という概念セットを準備し、ホモ・ソシオロジクスがこの三局面の「高度な一致」というきわめて非現実的な前提をおいていることを論じた。

ここで興味深いのは、Levinson の概念セットを三つ組み

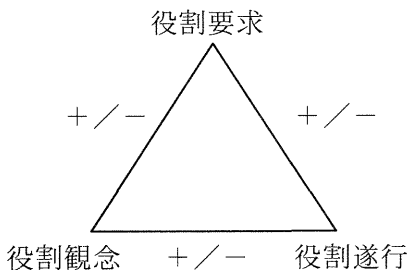


図 1. 役割 3 局面の関係

グラフで図式化した Morris (1971) の展開である。図 1 にそのグラフを一般的に表示した。各辺は自由に正負の符号をとり得るが、プラスは辺の両端局面の規範的内容が相対的に一致していることを、マイナスは相対的に不一致であることを表す。明らかに、ホモ・ソシオロジクスは3辺がすべてプラスの状況を述べている。そして符号を自由に置き換えることを考えれば、そうした3局面一致の状況の特殊性も明らかである。一方、3辺のどれかがマイナスのホモ・ソシオロジクス以外の状況は、それぞれが何らかの役割葛藤を示すものとして解釈できる¹³⁾。このように、このグラフは制度化の状況とともに役割葛藤の状況を典型的に表示し、なおかつ、役割観念の局面を含むことで解釈過程にも開かれている。

この単純かつ高性能の概念ツールを取り込んで、規範論と解釈論の統合を企図した役割の中範囲理論を試みたのが、渡辺 (1981) である。彼の概念図式は役割セットをベースとした複合的な役割関係にまで拡張されるが (渡辺 1984)、ここでは主観的フレームワークの構成に関する部分のみをみる。その部分を端的に表すのが図 2 である (渡辺 1981: 111 の図 2 に筆者が加筆)。ポイントは、この図が3局面の相互調整プロセスを表しており、その調整如何で Morris の三つ組みグラフのどれかの状況と対応づけられることである。

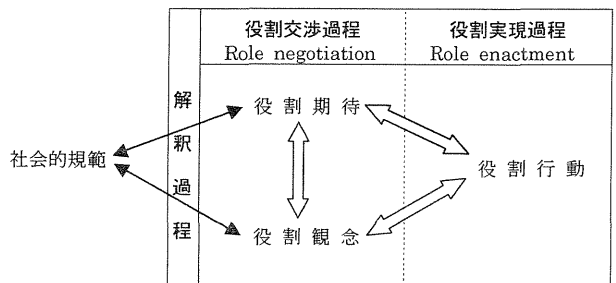


図 2. 役割 3 局面の調整プロセス

この図でいえば、我々の主観的フレームワークは中央部分の解釈過程と役割交渉過程を中核として捉えられるが、相互主観的なフレームワーク調整はむしろ役割実現過程の問題になるだろう。したがってこの図に記載されたすべての解釈・調整過程が関わると考えた方がよい。役割知識における役割定義の非一意性の問題は、やや位置づけにくいけれども、分析的には社会的規範の側の問題として考えてよいであろう。

5. 役割理論モデルの特定化に向けて

社会システム論や人間解放の社会理論の文脈にキー概念として位置づけられ、それがゆえにその文脈によって概念

の基本的性質が断片的に規定されてきた役割。それを文脈から相対化して、固有の役割理論としての可能性をすくい取る作業を、これまで行ってきた。そして我々は、知識調整のメカニズムとしての役割に、その基点となる概念図式的具体像を得ることができた。ここから役割理論モデルを特定化し、本論の途中で確認してきたような理論的課題を分析してゆかなければならない。けれども、当面たどりついた渡辺の図式は、足場としてまだ脆弱な部分がある。そうした足場の問題を含めて、今後のモデル化における留意点を整理しておこう。

渡辺の図式は、規範論と解釈論の統合を企図しつつも、どちらかといえば規範論(端的には構造-機能主義)に対して親和的な概念構成をとっている¹⁴⁾。これを、役割知識と主観的フレームワークを軸とする我々の枠組みにそのまま持ち込めるのかどうかは、もう少し慎重に吟味しなければなるまい。例えば、役割知識に関して小林が指定した解釈過程と制御過程は、図2のような単一ユニットでは落ち着きが悪い。むしろ、このユニットを複数個人間でどのようにつなげて拡張するかの問題になるであろう。役割が自他の役割関係の中でしか考えられない以上、そうしたユニット間の接合による図式の拡張は不可欠である。

その際に注意すべきことがもう一つある。図2には明示されていないが、渡辺の図式では相互行為の安定に関わる統制メカニズムとして、基本的にはサンクションが指定されている。前述したように、我々としてはサンクションとは異なる交渉過程を組み込み、価値的な動機づけと目的合理的な動機づけが対立するような状況に対する分析性能を、役割理論に与えたい。役割知識にもとづく認識調整に着目した理由の一つは、まさにそこにあった。一定の客観性をもつ役割知識が統制機構として作用する側面は、認識調整の内部においてよりは利害調整との間において、より考えやすい。そのために、役割定義をめぐる認識レベルの確認プロセスと、それが相互行為に運用されて展開する利害調整のプロセスを、別建てで定式化してつきあわせるような工夫が必要であろう。

最後に、役割に関する議論で取りこぼしてきた大きなものに、役割変化 role change の論点がある。しかしながら、その理論的現状については、80年代までのレビューに際して Turner が表明したコメントを繰り返すしかない。「ここ50年間にジェンダー、家族、職業などの役割の変化について実に多くのことが記されてきたが、役割変化の一般理論はほとんど進展していない」(Turner 1990: 87)。Turner が例外として言及する Eisenstadt et al. (1967) は、役割の再結晶化 recrystallization という概念で役割変化の段階的プロセスを一般化しようと試みており、役割現象に固有の変動規則性の探求として評価できるのだが、やはりダ

イナミックなメカニズムというよりは段階図式にとどまっている。自ら先のレビュー論文を通して役割変化の一般理論化を試みた Turner にしても、それは同じである。

我々が役割固有のメカニズムの定式化を志すのは、そのメカニズムの挙動(ダイナミクスと均衡)から役割変化という未開拓の領域に切り込めるのではないかと、という見通しがあるからである。そしてまた、そうでなければ、役割現象に固有の変動理論を展開することはできないと考えている。ただし、ここで再び先の問題に引き戻される。役割変化およびそこに一定の条件下で表れる均衡は、役割知識の認知レベルのものなのか、それとも具体的な相互行為レベルのものなのか。それらを分析的に分けるとすれば、両者はどのように関係づけられるのか。答えはまだ霧の中にあるが、いずれにしてもこの役割変化の問題は、役割理論の課題リストにぜひとも加えておかなければならない。

宿題は多い。けれどもそうしてたくさん宿題が発見される以上、Coulson (1972) のように役割概念に終止符を打つわけにはいかないのである。

付記：本稿は文部科学省科研費『フォーマライゼーションによる社会学的伝統の展開と現代社会の解明』(平成14~16年度基盤研究 [B] [1] No.14310084 代表者：三隅一)の補助を受けた研究成果の一部です。本稿の内容は日本社会分析学会第107回例会(2004年8月、宇部フロンティア大学)で報告し、いくつかの貴重なコメントをいただきました。記して感謝します。

注

- 1) 以下の文脈区分は、Wilson (1971) が社会学理論の主要な区分として提示した「規範的パラダイム」(行為に外在的なルールがあり、それを人びとが内面化することによって社会秩序が成立)と「解釈的パラダイム」(行為は絶え間ない意味の解釈過程であり、そうした具体的行為に依拠した社会的秩序しかありえない)を参考にした。三沢(1988)によればこのパラダイム区分は、前者={規則による支配・演繹的な説明形式・実証主義}、後者={解釈過程としての相互作用過程・行為者の見地・解釈的記述}という対抗関係を含む。役割理論に特定したところでは、前者は Linton (1936) から構造-機能主義に連なる文脈として、後者は Mead (1934) からシンボリック相互作用論に連なる文脈として、整理されることが多い(Sarbin 1968; Turner 1968, 1985; 山口 1975; 古谷野 1980)。分流の形成過程については、後述する Parsons から Dahrendorf に至る役割概念化が、それに対する批判的対抗を経て、社会学内部に「(a)行為期待を意味する規範的な社会学的役割概念と、(b)事実的行為を意味する社会心理学的役割概念とが分立」する状況を生みだしたとする野村 (1982) の捉え方が一般的であろう。
- 2) 同様の指摘として渡辺 (1981: 99) は次のようにいう。「役割概念は、それが社会と個人とを結ぶという、社会学にとってもっとも魅力的な位置にあるために、概念そのものの彫琢を待たずに、社会学的分析において過度の役割を負わされるという役割過重 (role overload) の状態にある」。また、我々は次の点でも渡辺と同意見である。「役割過重という困難な現状を、役割概念を周辺に追いやることによってではなく、役割概念を精緻化し発展さ

せることによって克服してゆかなければならない」(渡辺 1981: 100)。

- 3) したがって本稿はいわゆる役割論のレビューではない。役割論の全体像やより網羅的なレビューとしては Biddle and Thomas (1966), Jackson (1972), Komarovsky (1973), 橋本(1989: 第二部)等を参照。主題別のレビューでは、役割葛藤に関する Stryker and Macke (1978), 役割変化に関する Turner (1990), 性役割に関する Lipman-Blumen and Tickamyer (1975) 等も参考になる。
- 4) Parsons 社会システム論の保守性を指摘する批判は、しばしば社会変動の説明に対する弱さとして表明されるけれども、基本的にはここで指摘したようなマイクロ・マクロ・リンクの一方向性の問題であろう。社会変動に関しては、社会システム論はマクロ・レベルの説明性能をもっている。
なお、パターン変数への展開は、実証主義と理念主義の融合を目論む主意主義が、ウェーバー的理念主義に依拠したことによる影響が大きいと思われる。富永(1984)が的確に指摘するように、ウェーバー理解社会学は「人が勤勉に働くのはどういう場合かという主観的な動機理解に着目した説明であるが、しかし特定個人の特定行為についての動機理解ではなく、一般的な規則性を引き出すような動機理解であることによって一般化された因果の説明を可能にする」(富永 1984: 412-413), そうした狙いをもっていった。一言でいえば、理念的類型概念を用いた客観的動機把握の方法論なのである。パターン変数は、こうした類型概念としての企図をウェーバーと共有している。
- 5) これらの議論が他者性ないし社会性の根源にまで立ち戻るとき、それはむしろ言語哲学の議論と密接に関連してくる(野家 1993)。言語と役割概念との関係は、こうした社会の起源的発生論とは異なる意味でも重要だと思われるが、ここでは立ち入らない。
- 6) これと関連して、G. Simmel が「知識事実」(類型化, 理想化, 距離化, 自己提示ないし自己漏洩)と総称する動態的な過程に、ホモ・ソシオロジクスへの対抗的視座を求めるドイツ社会学者たちの議論にも注意しておきたい(野村 1987)。
- 7) Goffman や現象学的社会学など多様な論点を含む解釈論の中で、シンボリック相互作用論に着目するのは、それが構造-機能主義とある面での近さをもって対比的に議論を整理しやすいからである。ただし、まさにその意味で山口(1975: 146)が「主流派内の反対派(ロイアル・オポジション)」と称するように、解釈論のすべての重要論点がそこに集約されているわけではない。
- 8) 関連した観点として Nadel(1957: 訳49), 船津(1976: 187)を参照。
- 9) この観点は、Schutz (1970: 訳249)がいう「強いられた有意性」と「内発的有意性」の関連、および前者の後者への転化、を分析的に捉えている。
- 10) 先の Turner 評価に関しては、相互行為の現場における、そしてその場限りでの役割の客観性を認める立場をとる論者が少なくない(Shibutani 1961; Cicourel 1972; 片桐 1993等をみよ)。この論調との関係でいえば、深澤と小林とでやや距離がある。
- 11) その後の展開を含めた役割葛藤研究のレビューとして Stryker and Macke(1978)をみよ。役割葛藤はしばしば、個人が役割遂行の際に経験する困難やストレスを指す役割緊張 role strain として、操作的に捉えられる (Goode 1960; Snoek 1966)。
- 12) 以下に述べるような、解釈論に比重をおいた役割概念と、役割葛藤を通じた規範論との統合の試みは、すでに Handel (1979)がそのシナリオを示している。そのポイントは、相互行為のその場その場における便宜的な合意形成を、矛盾する役割期待を両立させながらその圧力を回避する装置として概念化できる、という点にあった。我々の試みは、その一つの具体的な展開である。
- 13) ただし Morris は、マイナスが1個だけの状況は論理矛盾を起こすとして除外し、4ケースのみを考察対象にしている。
- 14) 役割の3局面は Levinson よりも明確に、構造-機能主義的な

枠組みにおかれている。すなわち、役割期待は当該の社会システムの機能的要件に、役割観念はパーソナリティ・システムの機能的要件に、そして社会的規範は上位社会システムの機能的要件に、それぞれ対応づけられる。すぐ後に述べるサンクションの組み入れ方にしても、そうである。

引用文献

- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann 1966. *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. Doubleday & Company. (山口節郎訳『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法—』新曜社, 1977.)
- Berger, Peter and Stanley Pullberg 1965. "Reification and the sociological critique of consciousness." *History and Theory* 9(2): 196-211.
- Biddle, Bruce J. and Edwin J. Thomas 1966. *Role Theory: Concepts and Research*. John Wiley & Sons.
- Cicourel, Aaron V. 1972. "Basic and normative rules in the negotiation of status and role." In D. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction*. Free Press.
- Coulson, Margaret A. 1972. "Role: A redundant concept in sociology? Some educational considerations." In J. A. Jackson (ed.) *Role*. Cambridge University Press: 107-128. (浦野和彦ほか訳『役割・人間・社会』梓出版, 1985: 185-223.)
- Dahrendorf, Ralf. 1959 = 1968. "Homo sociologicus: On the history, significance, and limits of the category of social role." In R. Dahrendorf *Essays in the Theory of Society*. Stanford University Press: 19-87. (橋本和幸 [ドイツ語原論文] 訳『ホモ・ソシオロジクス—役割と自由—』ミネルヴァ書房, 1973.)
- Eisenstadt, Shmuel N., Dov Weintraub, and Nina Toren 1967. *Analysis of Processes of Role Change*. Israel University Press.
- 深澤健次 1990. 「役割知識についての基本的考察—役割論の統合をめざして—」『埼玉大学紀要(埼玉大学教養部)』26: 51-63.
- 深澤健次 1994. 「構造的役割と相互行為的役割—役割知識における両者の関係について—」『埼玉大学紀要(埼玉大学教養部)』30: 57-68.
- 船津衛 1976. 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- Getzels, J.W. and E.G.Guba 1954. "Role, role conflict, and effectiveness: An empirical study." *American Sociological Review* 19: 164-175.
- Gerhardt, Uta 1973. "Interpretive processes in role conflict situations." *Sociology* 7: 225-240.
- Goffman, Erving 1961. *Encounters: Two Studies in the*

- Sociology of Interaction*. Bobbs-Merrill. (佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学—誠信書房, 1985.)
- Goode, William J. 1960. "A theory of role strain." *American Sociological Review* 25: 483-496.
- Gross, Neal, Ward S. Mason, and Alexander W. McEachern 1958. *Explorations in Role Analysis: Studies of the School Superintendency Role*. John Wiley & Sons.
- Habermas, Jürgen 1973. "Stichworte zu einer theorie der Sozialisation." In J. Habermas *Kultur und Kritik*. Suhrkamp Verlag: 118-194.
- 廣松渉 1986-1988. 「役割理論の再構築のために」『思想』743~765.
- Handel, Warren 1979. "Normative expectations and the emergence of meaning as solutions to problems: Convergence of structural and interactionist views." *American Journal of Sociology* 84(4): 855-881.
- 橋本和幸 1989. 『社会的役割と社会の理論』恒星社厚生閣.
- Jackson, John A. 1972. *Role*. Cambridge University Press. (浦野和彦ほか訳『役割・人間・社会』梓出版社, 1985.)
- 片桐雅隆 1993. 「シンボリック相互行為論と役割理論」佐藤慶幸・那須壽(編著)『危機と再生の社会学』マルジュ社: 271-288.
- 小林修一 1983. 「役割連関と可視性—役割の知識社会学へ向けて—」『法政大学教養部紀要 [社会科学編]』47: 45-59.
- Komarovsky, Mirra 1973. "Presidential address: Some problems in role analysis." *American Sociological Review* 38(6): 649-662.
- 古谷野亘 1980. 「役割概念の系譜と問題点」『応用社会学研究』21: 63-84.
- 栗岡幹英 1980. 「役割概念の一傾向—現象学的方法の導入について—」『ソシオロジ』25(1): 37-53.
- Levinson, Daniel J. 1959. "Role, personality, and social structure in the organizational setting." *Journal of Abnormal and Social Psychology* 58: 170-180.
- Linton, Ralph 1936. *The Study of Man*. Appleton-Century.
- Lipman-Blumen, Jean and Ann R. Tickamyer 1975. "Sex roles in transition: A ten-year perspective." *Annual Review of Sociology* 1: 297-337.
- Mead, George H. 1934. *Mind, Self, and Society*. University of Chicago Press. (稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973.)
- Merton, Robert K. 1957 = 1968. *Social Theory and Social Structure (1968 Enlarged ed.)*. Free Press. (森東吾ほか訳『社会学理論と社会構造』[1957版訳] みすず書房, 1961.)
- Merton, Robert K. and Elinor Barber 1963. "Sociological ambivalence." In E.A. Tiryakian (ed.) *Sociological Theory, Values, and Sociocultural Change*. Free Press: 91-120. (森東吾ほか訳『社会学理論と機能分析』青木書店, 1969: 37-406.)
- 三沢謙一 1988. 「規範的パラダイムと解釈的パラダイム—現代アメリカ社会学のパラダイム革新—」新睦人・三沢謙一(編)『現代アメリカの社会学理論』恒星社厚生閣: 335-355.
- Morris, Brian 1971. "Reflections on role theory." *British Journal of Sociology* 22: 395-409.
- Nadel, Siegfried F. 1957. *The Theory of Social Structure*. Melbourne University Press. (斎藤吉雄訳『社会構造の理論—役割理論の展開—』恒星社厚生閣, 1978.)
- 野家啓一 1993. 『言語行為の現象学』勁草書房.
- 野村一夫 1987. 「ジンメルと役割理論」『社会学史研究』9: 64-82.
- 野村一夫 1982. 「規範的役割概念の理論構造—「個人と社会」の虚偽的媒介—」『創価大学大学院紀要』4: 233-251.
- Parsons, Talcott 1937 = 1949. *The Structure of Social Action*. McGraw-Hill. (Reprinted by Free Press with a new introduction [2vols] .) (稲上毅ほか訳『社会的行為の構造』木鐸社, 1974~1989 [5分冊].)
- Parsons, Talcott and Edward A. Shils 1951 = 2001. *Toward a General Theory of Action: Theoretical Foundations for the Social Sciences*. Harvard University Press. (Reprinted by Transaction Publishers, New Brunswick.) (永井道雄ほか訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社, 1960.)
- Sarbin, Theodore R. 1968. "Role: Psychological aspects." In D.L. Shills(ed.) *International Encyclopedia of Social Sciences Vol.13*. Macmillan & Free Press: 546-552.
- Schutz, Alfred 1970 (H.R. Wagner [ed.]). *On Phenomenology and Social Relation*. University of Chicago Press. (森川真規雄・浜日出夫訳『現象学社会学』紀伊国屋書店, 1980.)
- Shibutani, Tamotsu 1961. *Society and Personality*. Prentice-Hall.
- Snoek, J. Diedrick 1966. "Role strain in diversified role sets." *American Journal of Sociology* 71(4): 363-372.
- Stouffer, Samuel A. 1949. "An analysis of conflicting social norms." *American Sociological Review* 14: 707-717.
- Stouffer, Samuel A. and Jackson Toby 1951. "Role

- conflict and personality.” *American Journal of Sociology* 56(5): 395-406.
- Stryker, Sheldon and Ann S. Macke 1978. “Status inconsistency and role conflict.” *Annual Review of Sociology* 4: 57-90.
- 田中滋 1984 「『他者』の論理構造—物象化論と役割論の対話をめざして—」『社会学評論』35(3): 103-119.
- Tenbruck, Friedrich H. 1961. “Zur deutschen rezeption der rollentheorie.” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 13: 1-40.
- 富永健一 1984. 『現代の社会科学者—現代社会科学における実証主義と理念主義—』講談社.
- Turner, Ralph H. 1962. “Role-taking: Process versus conformity.” In A.M. Rose(ed.) *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*. Routledge & Kegan Paul: 20-40.
- Turner, Ralph H. 1968. “Role: Sociological aspects.” In D.L. Shills(ed.) *International Encyclopedia of Social Sciences Vol.13*. Macmillan & Free Press: 552-557.
- Turner, Ralph H. 1985. “Unanswered questions in the convergence between structuralist and interactionist.” In H.J. Helle and S.N. Eisenstadt (eds.) *Micro-Sociological Theory*. Sage: 22-36.
- Turner, Ralph H. 1990. “Role change.” *Annual Review of Sociology* 16: 87-110.
- 渡辺秀樹 「1981. 個人・役割・社会—役割概念の統合をめざして—」『思想』686 (1981年8月号): 98-121.
- 渡辺秀樹 1984. 「役割分析の基本枠組み—役割研究の体系化のための一考察—」『電気通信大学学報』35(1) (人文社会編): 111-125.
- Wilson, Thomas P. 1971. “Normative and interpretive paradigms in sociology.” In J.D. Douglas *Understanding Everyday Life*. Routledge & Kegan Paul: 57-79.
- 山口節郎 1975. 「社会学と役割理論」『エピステーマー』1975年11月号: 136-147.